

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：15401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26883007

研究課題名(和文) 日本・中国における戦争遺構のツーリズムに関する比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study On the Tourism of War Ruins in Japan and China

研究代表者

楊 小平 (YANG, XIAOPING)

広島大学・学術・社会産学連携室・研究員

研究者番号：30736260

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究企画は、2年間の研究を通して、戦争遺構のツーリズムが日中間における戦争の歴史認識の再生に機能していることを検証できた。また、中国の大学では、文化人類学や平和学研究はまだ新しい学問であり、国際研究集会などを通して、日本で学んだ知見は、最先端の学術分野の成果として、母国の大学での教育や研究を通して還元できた。また、日本ではこの分野についての研究者も多く多様な研究成果が見られるが、中国の戦争遺構についての一次資料は日本の中国研究にも資するものと考えられる。更に、調査資料に基づいた考察は中国と日本における戦争遺跡のツーリズムの文化的・政治的・歴史的特徴を比較することが出来た。

研究成果の概要(英文)：Through the fieldwork and research of two years, tourism of war remains could verify that it is functioning in the re-generation of the historical perception of the war in Japan and China. In addition, in the Chinese universities, cultural anthropology and museum studies is still a new study, such as through international research meetings, knowledge learned in Japan contribute to the academic fields in China. To analyze the survey materials, the research able to compare the features of the cultural, political and historical context of tourism of war ruins between Japan and China.

研究分野：文化人類学

 キーワード：戦争遺構の観光化 戦争記憶の表象 ダークツーリズム モノの人類学 戦争体験の継承 集合的記憶
 個的記憶 ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

(1) 社会的背景: 1980年代、日本における歴史教科書問題を契機に、日本政府による歴史修正主義に対抗する形で、中国の南京市をはじめとする各地で戦争遺構の発掘、抗日戦争博物館や記念碑の建設が盛んになり、歴史教育が一層高まった。これに対し、日本政府はそれらを「抗日教育」とであると批判した。また、最近の事例では、第二次安倍政権が発足して以降、安倍首相の国家主義的な施政を背景に、中国第十八回人民代表大会の臨時会において、南京大虐殺記念館で毎年12月13日、国家行事としての集会を開催することが決議された。このように、日中間における歴史認識の攻防には、それぞれ国内の政治体制から社会制度までの歴史的、社会的構造が異なる上、冷戦及びその終結等のような世界情勢や国家関係が大きく影響している。

こうした状況の中で、戦争遺構や戦争博物館はツーリズムの対象として新たに注目されている。その中の一例として、本州から沖縄への交通の便利化、また平和関連だけではなく、沖縄独自の文化等を含めた総合的な観光内容が充実しつつあることを背景に、近く10年前から、中高生の修学旅行先は、従来の平和学習の主な候補地としての広島から、沖縄に変える傾向が見られる。同じ戦争遺構を対象とする平和学習であるが、ツーリズムの環境・状況の変化によって、戦争遺構の内容が変化し、結果として「平和」への意味の変容も可能となることを言える。

(2) 学術的背景: ツーリズムとは通常、旅を通して非日常を経験するレジャーの一種として捉えられ、娯楽性のある楽しいものとして認識されている。しかし、戦争遺構のツーリズムが意味するところは、レジャーや娯楽とは対極に位置していると言える。日常を生きる多くの現代人にとって、究極の非日常性への旅となる。博物館やモニュメントは、時にイデオロギーや公的権力の象徴として、それらを構築する道具として用いられる。一方、ツーリストは、その場で目にする物事を、ガイドの説明やTVのドキュメンタリー番組での「語り」、書物や映画等で触れた表象としての「戦争の歴史」と重ね合わせ、集合的記憶として歴史表象に帰結する。

2. 研究の目的

日本と中国の間では、日中戦争に関する歴史認識の差異が際立つことで、相互の信頼的な関係を構築することに影響を及ぼしている。その差異は一般的に「加害」と「被害」という二項対立的な関係に由来すると理解されるが、根本的には日本と中国の人々はそれぞれの戦争の経験を有しながら、互いの経験に目を向けないことではないか。さらに、それぞれの経験は、戦争遺構や戦争博物館、記念モニュメント等を通してナショナルな集合的記憶として固定化される。こうして、日中間の歴史問題は、単なる歴史認識の差異にあるのではなく、むしろ戦争遺構や遺物の

保存や展示等による顕彰行為として現れている。本研究は、日本・中国における戦争の遺構や戦争博物館、記念モニュメント等を対象とするツーリズムの実態を調査し、それらの通文化的な比較分析を行うことで、多様な歴史的・社会的要素によって構築される歴史表象の存立構造を明らかにし、日中間の相互理解を阻害する契機を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本計画では、申請者が2007年以来、日本と中国における戦争博物館や平和記念館の調査を継続し実施している成果を踏まえて、社会構造と個人の主体性を同様に重視し、動的に社会を観察する文化人類学の研究方法の特徴を活かしながら、国家という境界を越え、「戦争と人の生」という観点から戦争が生み出した社会に焦点を置いた研究を行うとともに、これらの戦争遺構をめぐるツーリズムの実態を把握し、日本と中国のそれぞれの歴史的・社会的文脈の関連性を分析したうえで、戦争遺構の展示が近代の日本・中国の歴史認識の構築にどのような影響を与えるのかを検討する。そのため、調査対象となる戦争遺構や戦争博物館、記念モニュメントに関するツーリズムの実態について、①歴史的・社会的構造について資料分析、②ツーリズムに関連するデータの統計、③個別のツーリストに対するインタビュー、という3種類の調査を順次行っていく。

本計画は、ツーリズムの越境性が生み出す歴史表象の可能性を、「場と社会」、「人と移動」、「メディアと文化」という3つの領域において検討していく。その3つの研究領域とは次のとおりである。

(1) 「場と社会」の領域とは、戦争遺跡や戦争博物館、記念モニュメントが存立する地域社会との関係性を考察する。例えば、かつて軍都であった広島で、軍事施設が周辺社会の生活環境に与えた影響を検証するほか、中国東北部における残留化学兵器の影響、及びその後の新たな人的被害と環境汚染の問題も視野に入れつつ、かつての戦争と現在の市民生活との関係性を見出す。

(2) 「人と移動」の領域とは、二つの意味を含む。一つは、ツーリストの移動であり、ツーリストが非日常としての戦争遺構等の世界に入ることを意味する。もう一つは、中国東北部にある中国残留日本人の生活空間から長野県にある満蒙開拓平和記念館等まで「移動」の全貌を調査していく予定である。

(3) 「メディアと文化」の領域とは、文化の視点から戦争に関連する文化現象を分析する。「戦争は人々の生に何を与え、人々はどのような戦後社会を構築しているのか」という課題の下、戦争が戦場での戦い・争いだけでなく、戦争を遂行するためのプロパガンダ的なメディアの出現や銃後の生活などの諸側面にもつながっている。例えば、東京都千代田区にある昭和館では、「千人針」をは

はじめとする戦時中の文化が展示されている。

4. 研究成果

2年間の研究を通して、戦争遺構のツーリズムは、日中間における戦争の歴史認識の再生成に機能していることを検証できた。また、中国の大学では、文化人類学や博物館研究はまだ新しい学問であり、国際研究集会などを通して、日本で学んだ知見は、最先端の学術分野の成果として、母国の大学での教育や研究を通して還元できた。また、日本ではこの分野についての研究者も多く多様な研究成果が見られるが、中国の戦争遺構についての一次資料を用いられ、日本の中国研究にも資するものと考えられる。

(1) 研究調査を通じた一時資料の蒐集。

26年度は、先行研究の整理を踏まえて、中国の南京、重慶、大連、日本の広島、沖縄、長崎を対象に、侵華日本軍南京大虐殺同胞記念館、広島平和記念資料館、長崎平和記念資料館、東京の遊就館、昭和館、平和祈念資料館などに関する観光統計データ及び現地インタビュー調査による個人的意見などの資料を蒐集した。27年度は、重慶大空襲に関連する観光統計資料の蒐集、また、観光と儀礼との関係性を考察するために、南京に開催された「国家慰霊祭」への参与観察を行った。

(2) 調査資料を分析し、中国と日本における戦争遺跡のツーリズムの文化的・政治的・歴史的文脈の特徴を比較することが出来た。

①戦争遺跡の象徴的意味とナショナリズムの創造との関係性について、それぞれの社会にいて近い構造が見られた。例、「被害」「犠牲」を主要な意味合いとされること、また「継承」という用語は、記憶の手法としてツーリズムに強調される。

②ツーリズムにおける戦争遺跡の消費化・娯楽化がともに見られるが、日本と中国の死生観などの文化的思想や戦後における戦争観の差異によって異なると特徴が見られた。日本の場合、死者への敬意と距離感による「祈念」、戦争の絶対悪による「平和学習」といった意味付けにおいて「慰霊の旅」「学びの旅」が多く見られるのに対して、中国の場合、死者との緊密的関係による「娯楽」、抗戦の正義による「愛国教育」といった意味合いにおいて、「体験の旅」「愛国教育の旅」が多く見られる。

③世代の差が顕著的に見られた。

(3) 上記の調査資料及び発見を用いて、学術論文や研究集会の報告などを通して発信してきた。詳細は次の項目にて詳細するが、学術論文(1)、学会発表(11)など。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

1. 楊小平, 「方法としての「記念碑」——戦争遺構、慰霊碑、記念碑とツーリズム」, (査

読無), 『日韓合同国際研究会論集』 pp32-44, 2014年12月

[学会発表] (計 9 件)

1. 楊小平, 広島原爆観光から記憶のグローバル化をみる、「東アジアの戦争観光とナショナリズム」研究会 (亜細亜大学), 2016年02月13日

2. 楊小平, 「Succession and Transformation of the A-Bomb Experiences in Hiroshima Peace Memorial Museum」, Beyond Horizon2020研究会 (広島大学), 2015年11月27日

3. 楊小平, 「中国の戦争記憶におけるナショナリズムと民間人の役割——民間抗戦記念館における戦争記憶の在り方」, 「戦争と社会主義のメモリースケープ」研究会 (明星大学), 2015年11月21日

4. 楊小平, 「私の平和そしてこの時代」(招待講演), 国際ロータリー第2710地区大会 (宇部市), 2015年10月25日

5. 楊小平, 「広島における原爆遺構・記念碑へのダークツーリズムの歴史と現状」, Beyond Horizon2020研究会 (広島大学), 2015年6月30日

6. 楊小平, 「原爆資料の展示とアイデンティティの再確認——広島平和記念資料館の展示とダークツーリズム」, AJJ2015年春の研究大会 (成城大学), 2015年4月26日

7. 楊小平, 平和精神の実践を通じて、国際ロータリー大2730地区会長エレクト研修会 (延岡市), 2015年3月7日

8. 楊小平, 方法としての記念碑、第18回東アジア勉強会 (京都大学), 2015年1月31日

9. 楊小平, 「方法としての「記念碑」——戦争遺構、慰霊碑、記念碑とツーリズム」(招待講演), 日韓合同国際芸術研究会 (広島大学) 2014年12月28日

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

楊 小平 (YANG, Xiaoping)

広島大学・学術・社会産学連携室・研究員

研究者番号：30736260

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：